

特

集

トットちゃんがいた南部町



1

俳優、エッセイストで名高い黒柳徹子さんは、昭和20年（1945）3月10日の東京大空襲後、12歳の時に母親と弟と妹の4人で、戦前、偶然知り合った農家を頼りに旧平良崎村（現南部町）の諏訪ノ平に疎開しました。それから終戦を経て昭和21年（1946）の夏休みまで、三戸町立高等女学校（現青森県立三戸高等学校）に通い、級友や町民と交流しながらさまざまな体験をしています。

その後、黒柳さんは令和8年（2026）2月に放送開始から50周年を迎えたテレビ朝日の「徹子の部屋」で多彩なゲストを迎え、また、ユニセフ親善大使などの平和活動を通して人と人を結ぶ心の懸け橋となりました。

町では、黒柳さんとのご縁を大切にしようと、「歴史を伝える」「平和の精神と勇気を育む」「郷土の助け合いの精神の継承」を目的とする「黒柳徹子記念ルーム」を、令和9年（2027）4月1日に開館する予定です。（*本文には「窓ぎわのトットちゃん」から、適宜、引用しています。）



2

偶然の諏訪ノ平疎開

国民的スターの黒柳徹子さんは、ベストセラーになった『窓ぎわのトットちゃん』でも知られますが、この「トットちゃん」という呼び名は、幼少期に自分の名前をよく言えずに「テッコ」ではなく「トット」と言っていたからだといわれています。

そのトットちゃんが東京北千束から諏訪ノ平に疎開してきたのは、昭和20年（1945）3月半ば頃で、父親の守綱氏は前年の春に出征していたため、ママの朝さん（愛称はチヨッチャン）と長女の徹子さん（12歳）、次男の紀明さん（6歳）、次女の眞

- 1——三戸町立高等学校時代の黒柳徹子さん
- 2——諏訪ノ平駅舎／駅舎は開設92周年を迎え改築することに。
令和7年10月2日、駅改築整備推進協議会による「駅舎お別れの会」が開催された
(地域住民と挨拶する西舘隆会長)
- 3——諏訪ノ平駅付近の風景／下に鉄路が走り、その左側のリンゴ畑に
黒柳一家のリンゴ小屋があった。背景に見えるのは名久井岳(令和8年4月17日)
- 4——黒柳一家が仮住まいしたリンゴ小屋内部／昭和62年に西舘隆さんが再現した(令和7年10月2日)

理さん(2歳)の4人でした。長男の明兒さん(めいじ)は残念ながら前年の5月に敗血症で夭逝(ようせい)しています。

諏訪ノ平が疎開先になったのはまったくの偶然で、昭和16年(1941)のアメリカとの開戦前に、朝さんが実家の北海道空知郡滝川村(現滝川市)へ家族で里帰りした帰路、青森から上野に向かう汽車の中で、前に座っていた相内の沼畑さんという男性と話を交わしたのがきっかけでした。

その後、りんごを送ってもらうなど交際していた縁で、昭和20年3月10日の東京大空襲のあったすぐ後、疎開しました。上野から3日間の疎開行は、『窓ぎわのトットちゃん』で「二人ぼっちの夜行列車」「おしっこがしたい」「お母さま!」「キリストの伝説」と矢継ぎ早に展開し、そのテンポとビビッドな表現は、まさにトットちゃん(めんもくやん)の面目躍如とした前奏曲になっています。

リンゴ小屋のリフォーム

諏訪ノ平に着いてからの朝さんは、「持ち前の魔法使いぶりを発揮した」とあるように、仮住まいのリンゴ小屋を大変身させました。隙間だらけの板張りの壁を見て「窓からも天井からも、太陽の光が射してくるなんて素敵ね」などと言いながら、リンゴ箱を逆さにしてゴブラン織りの布をかぶせ、ロココ風のおしゃれな椅子にしたとあります。

3



この線路の東側、馬淵川沿いのリンゴ畑にあったリンゴ小屋は、相内の沼畑さんが紹介してくれました。その後、リンゴ小屋が大雨で大氾濫した川の水を被った時には、諏訪ノ平駅前で製材業を営む西舘家が、2番目の住まいとして駅前の長屋を世話してくれました。

そこは西舘製材所の従業員や大工さんも入っていた長屋で、幸い一番端の部屋が空いていました。事情が分かっていただけた大家の西舘さんは、家賃の代わりに「休みつ」といって、苗代・田植・稲刈りの忙しい時に何度かお手伝いをしていただくことになりました。さらに幸いしたのは、長屋に隣接して民間の青

物市場があったことです。

はちめんろつび

八面六臂の朝さん

諏訪ノ平駅前の青物市場は、太平洋戦争前に旧平良崎村の農業団体の人たちが西舘製材所の土地を借り、古材を持ち寄って建てたもので、朝さんの活躍は、この青物市場を舞台に始まります。

トットちゃんが「ママの環境適応力には、いま思い出しても本当に感心させられる」と述懐しているように、朝さんのリンゴ小屋時代には、いつの間にか「農協みたいどころ」

4





5

三戸高女時代のトットちゃん

さて、子どもたちの学校のことですが、次男の紀明さんは小学校へ、トットちゃんは三戸町立高等女学校（現青森県立三戸高等学校）に通うことになりました。リンゴ小屋から諏訪ノ平駅まで

その後、定食屋・行商人として手腕を発揮し、その収入は焼失した東京北千束の住まいを再建する費用になるほどでした。

に勤めるようになり、夜は近所の人たちの服を縫う内職をし、にわか仕立ての「かつぎ屋さん」になって、諏訪ノ平で穫れた果菜類を八戸港で新鮮な魚と物々交換、不足気味のタンパク質を確保しました。

さらに戦争が終わってすぐの長屋時代になると、賑わいを取り戻した青物市場に隣接する好条件を利用して、長屋土間部分を定食屋にしました。これはあつという間に大人気店になったということです。八戸港のみならず、陸奥湊駅まで買い出しに行く時にはトットちゃんも手伝いました。そこでは情報源となった「イサバのカッチャ」（浜の行商のおばさん）との交流もあったようです。



6

歩いて20分、そこから汽車で三戸駅までの1区間5分、学校まで歩いて30分、合計約1時間の通学でした。

疎開して来てすぐに、黒柳家は先に南部町に疎開していた櫻井家と知り合うことになりました。東京で洋裁店に勤めていた芳雄さん・はなさん夫妻は、はなさんの実家の旧南部町で長女の艶子さん（6歳）と次女的美智子さん（4歳）と一緒に避難生活をしていました。その年の4月に艶子さんは小学校へ入学。そこにトットちゃんの弟の紀明さんがいたのがきっかけか、「東京弁」で通じ合う朝さん・はなさんは意気投合するおしゃべり仲間になったとか。



7

櫻井家のその後は、ご主人の芳雄さんが昭和43年（1968）、相内の国道沿いに「さくらドライブイン」を開業。長女の艶子さんが跡を継いでいましたが、令和7年（2025）12月に店を閉じました。

その前の10月、艶子さん（85歳）と3女の留美子さん（78歳）に、トットちゃんやその後の黒柳家との交流を伺いました。

三戸高女時代のトットちゃんはやはり

- 5 諏訪ノ平駅付近の長屋跡と西館隆さん（令和7年10月2日）
- 6 長屋跡に隣接する青物市場跡／鉄骨の季節開設市場になったのは、
西館隆さんが昭和39年に諏訪ノ平に来て代替わりした以降で、今は駐車スペースになっている（令和7年10月2日）
- 7 諏訪ノ平駅と三戸駅間の途中にある鉄橋
- 8 黒柳家の思い出を語る櫻井艶子さん（左）と妹で3女の留美子さん（令和7年10月2日／「さくらドライブイン」で）
- 9 「徹子の部屋」収録スタジオで黒柳徹子さんと工藤町長（令和6年12月17日）

8



トットちゃん、例えば「トット、線路にぶら下がる」では、おてんばな冒険話が書かれています。

下校して諏訪ノ平駅に着いたトットちゃんは、友達との別れ際、大きく手を振って大切な定期券を川に落としてしまいました。翌日から約5キロの道のりを歩くことになったトットちゃんは、一計を案じて線路を往復することにしました。もちろん汽車の時刻表を頭に入れ、危険回避もシミュレーションしながらでしたが、その日は帰路の諏訪ノ平駅までもう少しの鉄橋で、思い掛けず臨時の貨物列車に遭遇したのです。

「黒柳徹子記念ルーム」を開設

令和9年（2027）4月のオープンを目指し、南部町役場南部支所に「黒柳徹子記念ルーム」を整備中です。

きっかけは、令和3年（2021）6月10日付の「八戸爺」と名乗る工藤町長宛の

鉄橋の下は馬淵川の深い急流、絶体絶命のピンチを線路の下にもぐり込み、両手で枕木にぶら下がって汽車が頭の上を通過するのをやり過ごし、やっとのことで這い上がった九死に一生を得たのです。

9



匿名葉書。そこには「どうか南部町に黒柳徹子記念館の設立を早急に進めてください。きっと日本の宝になりますよう」とありました。背中を押してもらった町長は、令和6年（2024）12月17日にテレビ朝日系「徹子の部屋」の収録スタジオを訪問して趣旨を説明し、開設の承諾を得ました。

記念ルームの基本的な考え方は、「黒柳徹子さんの疎開経験と現在の平和活動から、南部町のこどもたちに平和の大切さを教え、地域への愛着と未来への希望を育むことを目指します」というものです。